

日本人は盆踊り好きだ。

その定番の音楽は『東京音頭』である。

なんとも日本の掛け声らしく、

「ハア〜」で始まる景気付けは

櫓太鼓を取り囲んだ浴衣姿の盆踊り参加者を踊る陶酔の世界に誘って行く

文川山智

時は昭和七年、処は日比谷公園

「昭和恐慌」に疲れた人々は

なにかを求めたかのように集まった
須臾の忘我が欲しかったのだ

公園の真ん中には櫓が組まれた

櫓には藤本二三吉と三島一声が立つ

やがて鐘に三味に太鼓の音が鳴り始めた

二三吉の美声が夕景の日比谷に韻を刻む

「ハア 踊り踊るなら チヨイト

東京音頭 ヨイヨイ

花の都の 花の都の真ん中で サテ

弾かれたように群衆の手足が踊った

団扇が翻り、下駄の音が小気味い

三島一声の歌声が追っ掛ける

「ハア 東京よいとこ チヨイト

日乃本照らす ヨイヨイ

君が御稜威は 君が御稜威は天照らす サテ

当初『丸の内音頭』と題名された盆踊り唄は

丸の内、数寄屋橋ほか東京一円が織り込まれ

『東京音頭』と改題された

翌八年、二三吉に代わって

小唄勝太郎が抜擢

レコード売上げは

一二〇万枚、

空前を記録した



小唄勝太郎



三島一声

昭和歌謡 誕生物語

【第31曲目】

— 東京音頭 —

小唄勝太郎

いよいよ盆踊りシーズン。
振り付けなんか知らないけど、この曲
が流れてくると思わず小踊りしたくなっ
てしまう——『東京音頭』は、間違いな
くそんな1曲だろう。

西條八十作詞、中山晋平作曲。もともと
『丸の内音頭』として作られたこの曲は、
昭和恐慌で景気悪化にあえぐ日比谷界隈
の飲食店店主らが、地元を活気づけたい
と企画した日比谷公園での盆踊り大会で
披露されたもの。後に歌詞とタイトルが
改められ、小唄勝太郎と三島一声の歌唱
でレコード化されて爆発的に流行。それ
が昭和8年（1933）のことである。


新潟で米穀商の長女として生まれた小
唄勝太郎（本名・眞野かつ）は母が他界
し父が破産すると、沼垂町（中央区）の
料亭「鶴善」の養女となり、「お勝」の
名で座敷に上がり唄が評判の人気芸者と
なった。

上京後、葎町（現在の人形町）で芸者
をしていた頃、レコード産業が黎明期を
迎えると、同じ葎町の藤本二三吉が歌
う『浪花小唄』や『祇園小唄』が大ヒッ
ト。勝太郎にも白羽の矢がたち、日本ビ
クターと正式契約することに。そして昭
和7年、銀座の柳植樹記念として作られ
た『柳の雨』で歌手としてデビューする
ことになった。

さて、東京を飛び越え日本全国の盆踊
りを一色に染めた『東京音頭』の大ヒッ
トを受け、勝太郎はその後「ハア〜」で

始まる通称「ハア小唄」を連発していく。
三味線と小太鼓に合いの手という、いわ
ばお座敷唄の様式をベースに、太鼓と管
弦楽伴奏で厚みを持たせた新しい「音頭」
は、こうして昭和歌謡の中で、ひとつの
ジャンルを確立していくことになるので
ある。

勝太郎の力強く景気よの歌声が日本
中に響き渡ってから、早や80有余年。『東
京音頭』は現在、盆踊りの定番曲として
だけでなく、ヤクルトスワローズの応援
歌としても馴染みになっている。

これは昭和29年（1954）、国鉄スワ
ローズ私設応援団団長が、対戦する巨人
側観客席の盛り上がりに対し、味方側の
あま  ガラガラぶりに奮起したことに
始まる。最前列でひとり大声を出し歌唱
応援したことが最初で、その後ファンの
間に広がり、ビニール傘を振って『東京
音頭』を歌うのが定番となつて今に至つ
たそうだ。

なんでも、この曲の全てのカバーを合
わせると、総売上は2000万枚に達す
るのだとか。そう考えると、数あるヒッ
ト曲の中で、あるいは『東京音頭』こそ
が20世紀最大のヒット曲といつていいの
かもしれない。

山川智●1962年東京生まれ。テレビ制作会社、週
刊誌記者を経てフリーランスに。著書に『東方神起の涙』
『東方神起 J・Y・J を行く』（共にイースト・プレス）、
『ビューマンドキュメント 幸せのきずな』（リール出版）
など。また出版プロデューサー作品として『生きる 義家弘
介』（スターツ出版）、『デキる社員』『狂食ギャル』（共に
イーストプレス）など多数。